

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVIII

1998年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XVII

2002. 3

本書には長原遺跡西南地区と瓜破遺跡東南地区の発掘成果を収録する。

長原西南地区では江戸時代の馬池に係わる溝が見つかった。古墳時代では掘立柱建物・溝・土壇が検出され、遺跡の西部に広がる古墳時代後期の集落の分布と変遷を考えるうえで貴重な資料を提供した。

また、瓜破遺跡東南地区では飛鳥時代の掘立柱建物が確認され、瓜破台地上における当該期の大型建物群の南東隅に位置することが明らかとなった。

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVIII

1998年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会



長原遺跡西南地区 古墳時代の遺物

「長原・瓜破遺跡発掘調査報告」 XVIII 正誤表

頁	行	誤	正
5	11	明褐色シルト質細粒砂	明 <u>黄</u> 褐色シルト質細粒砂
8	4	(図5～7、図版 <u>9</u> ～12)	(図5～7、図版 <u>8</u> ～12)
25	7	オリーブ褐色シルト質 <u>粗</u> 細粒砂	オリーブ褐色シルト質細粒砂
奥付		ISBN-900687-51-0	ISBN-900687-52-9

大阪市平野区

長原・瓜破遺跡発掘調査報告

XVIII

1998年度大阪市長吉瓜破地区

土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書

2002.3

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

本書は、大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘成果を収めた『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』シリーズの18冊目に当る。

本書では1998年度に行った調査成果を収録している。区画整理事業も終盤を迎え、本年度の調査地は遺跡西部の3箇所にとどまったが、各時代にわたる多くの成果が得られた。

まず、長原遺跡の西南部では、江戸時代の馬池に係わる溝が確認されたほか、古墳時代の掘立柱建物や土壌が検出され、周辺での古墳時代集落の分布を知るための手がかりを提示しえた。

瓜破遺跡東南地区の調査においては、瓜破台地上の飛鳥時代における大規模な建物群の南東部分が明らかになった。この建物群は東隣の長原遺跡の水田開発を主導した集団に係わる施設と推定されており、当該期の地域支配のあり方を知るうえで貴重な資料である。

このように既往の調査結果をふまえつつ、当地の歴史をより豊かに再現できる資料を得ることができた。今後は、調査の成果を多くの市民に還元すべく、普及・啓発活動に努めることも我々に課せられた使命である。

最後に、発掘調査および報告書作成にあたって、ご理解、ご協力を賜った関係機関、各位に心よりお礼申し上げる。

2002年3月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は大阪市建設局長吉瓜敏区画整理事務所が施行した、大阪市平野区内における1998年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査の報告書である。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会調査部長永島輝臣の指揮のもとで、調査員村元健一が行った。各調査の地番・面積・期間・担当者は表1に記した。
- 一、木製品および金属製品の保存処理は調査課伊藤孝司・島居信子が行った。
- 一、本書の編集および執筆は、調査課長京嶋覚の指揮のもと、上記調査員との検討や調査記録をもとに、主として調査課調査員小田木富慈美が行った。英文要旨の作成はワシントン州立大学のMatthew W. Van Pelt氏が行った。
- 一、遺構写真は主として担当調査員が撮影し、一部の撮影は徳永園治氏に委託した。遺物写真の撮影は内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、大阪市建設局および同市水道局・同市下水道局・日本電信電話株式会社・関西電力株式会社・大阪ガス株式会社が負担した。
- 一、本書に掲載した石器遺物は、大阪市文化財協会での石器整理番号である登録番号で管理されている。各石器遺物の登録番号は、本文で使用了した報告番号の前に98-8次調査は98AA、32次調査は98AD、46次調査は98AEを付加したものとする。例：報告番号44の場合は98AA44。
- 一、発掘調査で得られた出土遺物、図面・写真などの資料は当協会が保管している。

凡 例

- 一、本書において用いる地層名は原則的に各調査ごとに個別に記載する。長原遺跡の標準層序との対比は[趙哲濟2001]に基づいて行い、標準層序の長原○層とし、図表等ではNG○層とした。なお、前掲書における長原遺跡の標準層序表は別表に掲載した。
- 一、各調査の記載の冒頭に載せた層序表での、各々の地層における遺構欄で用いた記号は、△＝上面検出遺構、←＝地層内検出遺構、▼＝下面検出遺構、↓＝基底面検出遺構をそれぞれ示している。
- 一、遺構検出面の層序関係に基づく呼称および形成過程に基づく呼称は、[趙1995]に従って行った。
- 一、遺構名の表記には、塀・櫓(SA)、掘立柱建物(SB)、溝(SD)、井戸(SE)、土壇(SK)、ピット(SP)、畦畔(SR)、その他の遺構(SX)、自然流路(NR)の略号を用いた。略号の後ろには各調査回数ごとの通し番号を付し、遺構の大まかな検出層準が区別できるように、例えば、長原4層層準の溝にはSD4〇〇、長原7層層準の土壇にはSK7〇〇のように表記した。
- 一、水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇〇mと表記する。また、挿図中の方位は座標北を示し、座標値は国土平面直角座標(第VI系)の値である。
- 一、本書で頻繁に用いた土器の分類と編年は下記の文献に拠っている。本文中では煩雑さを避けるため、これら引用・参考文献をその都度提示することは割愛した。
古墳～飛鳥時代の須恵器：[田辺昭三1966]、飛鳥～奈良時代の土器：[奈良国立文化財研究所1976]・[古代の土器研究会編1992]

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	1
第1節 1998年度の発掘調査と報告書の作成	1
第2節 発掘調査の経過と概要	3
1) 長原遺跡西南地区	3
i) 98-8次調査	
2) 瓜破遺跡東南地区	3
i) 98-32・46次調査	
第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果	5
第1節 98-8次調査	5
1) 層序とその遺物	5
i) 層序	
ii) 各層出土の遺物	
2) 遺構とその遺物	12
i) 江戸時代	
ii) 古墳時代	
3) 小結	22
第Ⅲ章 瓜破遺跡東南地区の調査結果	25
第1節 98-32・46次調査	25
1) 層序とその遺物	25
i) 層序	
ii) 各層出土の遺物	
2) 遺構とその遺物	28
i) 室町～江戸時代	
ii) 飛鳥時代	
3) 小結	36
別表	39
引用・参考文献	40
あとがき・索引	
英文要旨	
報告書抄録	

図 版 目 次

- 1 長原遺跡西南地区98-8次調査地 地層断面・江戸時代の遺構
 上：調査区東壁断面
 下：SD201(東から)
- 2 長原遺跡西南地区98-8次調査地 古墳時代の遺構
 上：第2c層基底面遺構(北から)
 下：第2c層基底面遺構(南から)
- 3 長原遺跡西南地区98-8次調査地 古墳時代の遺構・ナウマンゾウ足跡化石
 上：SK701遺物出土状況(西から)
 中：第7層上面ナウマンゾウ足跡化石(東から)
 下：第7層上面ナウマンゾウ足跡化石(西から)
- 4 瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 地層断面・江戸時代の遺構
 上：Ⅰ区南壁断面(北から)
 下：Ⅰ区SD201断面(東から)
- 5 瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 飛鳥・室町時代の遺構
 上：Ⅱ区第3層下面遺構(西から)
 下：Ⅰ区第5層下面遺構(東から)
- 6 瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 飛鳥時代の遺構
 上：Ⅰ区飛鳥時代の遺構(西から)
 下：Ⅱ区SB701(西から)
- 7 瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 飛鳥時代の遺構
 上：Ⅰ区SD701・702(北から)
 下：Ⅱ区SD721(北から)
- 8 長原遺跡西南地区98-8次調査地 出土遺物
- 9 長原遺跡西南地区98-8次調査地 出土遺物
- 10 長原遺跡西南地区98-8次調査地 出土遺物
- 11 長原遺跡西南地区98-8次調査地 出土遺物
- 12 長原遺跡西南地区98-8次調査地・瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 出土遺物
- 13 瓜破遺跡東南地区98-32・46次調査地 出土遺物

挿 図 目 次

図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地	2	図15 SB701・702実測図	18
図2 長原遺跡西南地区の調査位置	3	図16 SK701実測図	19
図3 瓜破遺跡東南地区の調査位置	4	図17 SK701出土遺物	20
図4 98-8次調査区東壁断面図	6	図18 SB701・SK702・SP701・SD701出土遺物	21
図5 各層出土遺物	7	図19 98-32・46次調査区南壁断面図	26
図6 第5層出土遺物	8	図20 各層出土遺物	27
図7 各層出土石器遺物	9	図21 室町～江戸時代の遺構平面図	29
図8 江戸時代の遺構平面図	11	図22 室町～江戸時代の溝出土遺物	30
図9 SD201実測図	12	図23 飛鳥時代の遺構平面図	32
図10 SD201出土遺物(1)	13	図24 SB701実測図	33
図11 SD201出土遺物(2)	14	図25 飛鳥時代の溝出土遺物	34
図12 SD202実測図	15	図26 飛鳥時代の主要な遺構分布	37
図13 SD202出土遺物	15		
図14 古墳時代の遺構平面図	17		

表 目 次

表1 1998年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査一覽	1	表2 98-8次調査区の層序	5
		表3 98-32・46次調査区の層序	25

写 真 目 次

写真1 98-32次調査風景	4	写真2 SD202遺物出土状況	16
----------------	---	-----------------	----

第I章 調査の経過と概要

第1節 1998年度の発掘調査と報告書の作成

1998年度の土地区画整理事業施行に伴う発掘調査件数は3件で、発掘総面積は764㎡である(図1、表1)。調査は長原遺跡西南地区と瓜破遺跡東南地区で行われており、長原遺跡西南地区が1件292㎡、瓜破遺跡東南地区が2件で472㎡である。土地区画整理事業が終息に近づくにともない、発掘調査面積は一昨年度および昨年度に比べて減少している。

調査はまず98-8次調査が1998年5月11日から開始し、翌1999年3月17日に98-46次調査が終了したのを最後に当年度の事業をすべて完了した。各調査次数の詳細は表1のとおりである。検出した遺構および遺物は実測図や写真によって記録し、遺物について保存処理が必要なものはその都度処理を行った。

なお調査次数は遺跡記号NG(長原遺跡)の後に年度、各年度における調査開始順の番号を付けて表記しているが、煩雑であるため本書ではNGを省略して表記する。

現場終了後の遺物の水洗・マーキング・接合およびおもな遺物の図化、写真の整理などの基本的な整理作業および各現場における層序、遺構の検討は調査担当者である村元が行っている。報告書作成に必要な遺構・遺物の図面の作成は、調査課長京嶋の指揮のもとで、小田木が行った。各調査次数の報告執筆は、調査担当者が作成した完了報告書をもとに、同じく小田木が行った。

なお、98-32・46次調査地は遺跡地図のうえでは瓜破遺跡に含まれるが、一連の土地区画整理事業に伴うため、「NG」を冠している。

表1 1998年度土地区画整理事業施行に伴う発掘調査一覧

発掘次数	面積	調査地帯	担当者	調査期間
長原遺跡西南地区				
NG98-8次	292㎡	平野区長吉長原西3丁目	村元健一	1998年5月11日～1998年8月26日
瓜破遺跡東南地区				
NG98-32次	236㎡	同 瓜破東8丁目	村元健一	1998年10月15日～1998年12月22日
NG98-46次	236㎡	同 瓜破東8丁目	村元健一	1998年12月17日～1999年3月17日

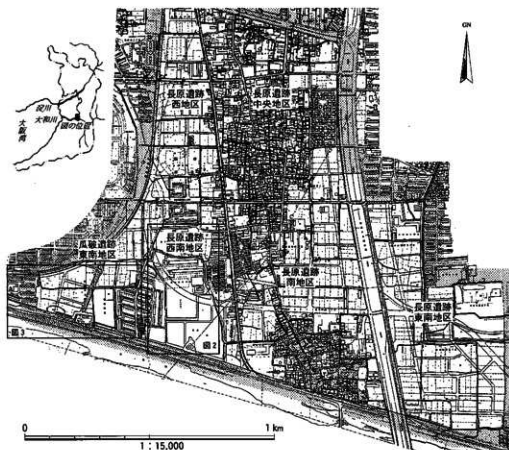


図1 土地区画整理事業施行範囲と調査地

)長原遺跡西南地區(圖2)

今年度は西南地区では98～8次調査のみが行われた。本調査地は「馬池谷」の西側に当り、東にはその谷地形を利用した馬池が存在する。付近の調査結果では、調査地の西および南西方に飛鳥時代の掘立柱建物群が確認されている。また、北には古墳時代の集落が拡がり、谷を挟んだ東側には古墳群が存在する。なお、南側のNG95-28次調査地においては古墳時代の井戸や奈良時代の掘立柱建物が確認されている[大阪市文化財協会1996]。今回の調査では、これら各時代の集落と関連する遺構の存在が予想された。

2) 瓜破遺跡東南地区(図3、写真1)

両調査地は瓜破遺跡東南地区の南部に東西に並んで位置している。この西方ではUR86-11次、UR91-22次調査などにおいて飛鳥時代の大規模な掘立柱建物群が確認されている。しかし、東北に位



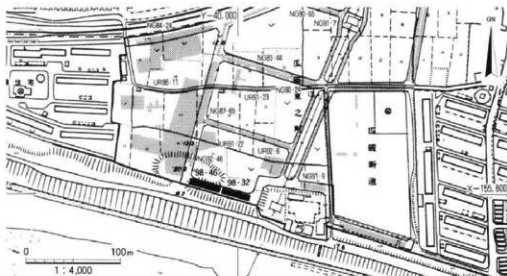


図3 瓜破道跡東南地区の調査位置

置するUR92-6次調査では、東西方向の溝以外の遺構は少なく、西から東にかけて次第に遺構が希薄になっていくことが予想された。そのため、本調査では、飛鳥時代の建物群の東端が明らかになるものと期待された。

調査に当っては、現代客土および現代作土を重機で掘削して、以下に堆積する地層

と遺構とを人力で掘削した。98-32次調査は1998年10月15日より準備工に着手して、H鋼による土留め工事を行った。その後10月29日より調査を開始し、12月21日までにH鋼の引き抜きを含むすべての作業を終えた。引き続き、12月22日から98-46次調査の準備作業を開始し、1999年1月5日からH鋼の打設を行い、現代客土を重機で掘削した。調査は1月8日から2月23日まで行い、3月17日までにH鋼の引き抜きを含むすべての作業を終了した。

今回の調査では飛鳥時代の建物と溝の存在が明らかとなり、当初予想された、飛鳥時代の建物群の東端を確認することができた。

なお、両調査地は隣接しており、連続して行われたものであることから、本報告では32次調査地をⅠ区、46次調査地をⅡ区として、両者をまとめて記載する。



写真1 98-32次調査風景

第Ⅱ章 長原遺跡西南地区の調査結果

第1節 98-8次調査

1) 層序とその遺物

i) 層序(図4、図版1、表2)

調査個所の層序は表2に示したとおりである。

第1層は現代客土層である。その下には馬池の堆積層である第2層があり、3枚に分けることができる。第2a層は現代の水成層で、第2b層は第7層起源の粘土偽礫からなる客土層である。第2c層は水成層であり、肥前磁器などが出土することから、近世以降の馬池に伴う堆積層と考えられる。

第3層はSX201の埋土である。

第4層は層厚20cmの明褐色シルト質極細粒砂であり、西半のみに分布する作土である。長原4B層に相当する。

第5層は灰黄褐色極細粒砂質シルトで、層厚は10cmあり、調査区の南端にのみ残存する。長原7B層に当る。

表2 98-8次調査区の層序

図版 調査個所	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
9	1	現代客土	80~100				
1	2a	黄褐色粘土	60		国産陶磁器・灰磁器・土師器・瓦・鉄	水成	
	2b	増黄灰色粘土	40		国産陶磁器・灰磁器・土師器・瓦(枕瓦)		
2	2c	灰オリーブ色粘土	60	▼ SX201 I SX191・202, SX701・702, SX701	国産陶磁器・瓦質土器・瓦器・灰磁器・土師器・瓦	水成	1~26
	3	含粘土偽礫明褐色シルト質中粒砂		SX201	肥前磁器・瓦器・灰磁器・土師器・瓦		
4B	4	明黄褐色シルト質極細粒砂	20		灰磁器・土師器	作土	
7B	5	灰黄褐色極細粒砂質シルト	10		灰磁器・土師器		27~43
15	6	オリーブ色粘土質極粒砂	60			水成	
16	7	灰色粘土	40	▲「ヤマト」足跡化石		水成	
17	8	緑灰色粘土質極粒砂	40			水成	

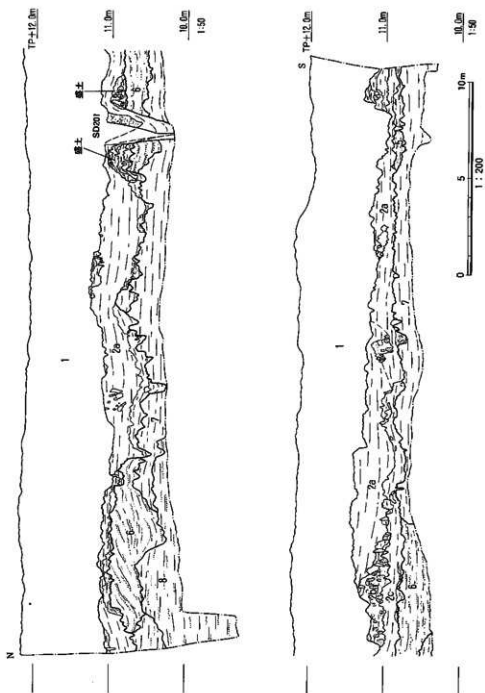


图4 98-8次調查区東横断面图

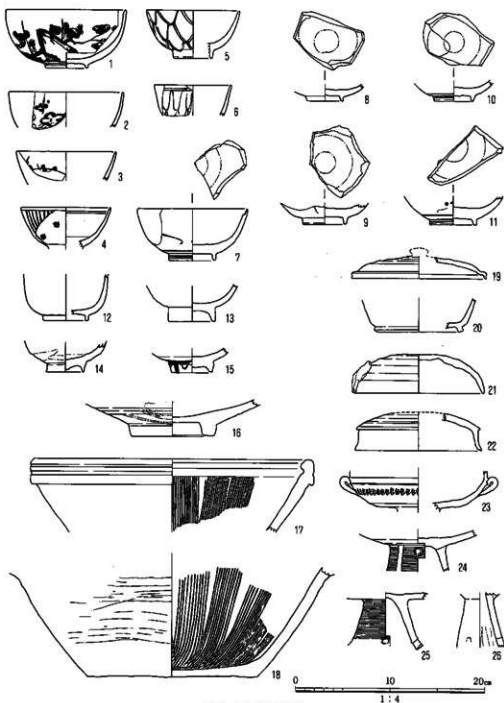


圖5 各層出土遺物
第2c層(1~18)、第2・3層(19~26)

第6～8層は長原15層以下に当る段丘構成層である。第7層上面では多数のナウマンゾウの足跡化石を検出した(図版3)。ただしこれらの中では、行跡を確認できるものはなかった。

ii) 各層出土の遺物(図5～7、図版9～12)

1～18までは馬池に堆積する水成層の第2c層に伴うものである。19～26は第2・3層から出土し、下位層の遺物が遊離したものと思われる。

1～8・10・11・13は肥前磁器碗である。1・2は口径が12cm台で他よりも大きく、外面には梅樹文を描く。4は縦縞と縦格子文を描く碗である。5は外面に二重の網目文、6は外面に一重の網目文を描く。6は口径が小さく、湯飲み茶碗であろう。7・8・10・11は底部内面に蛇の目状に釉刺ぎする。13は呉器手である。9は唐津焼皿である。12は産地不明の陶器碗である。14は唐津焼碗、15は内野山系の肥前陶器で外面に青緑色の釉が施される。16は唐津焼皿である。17・18は産地不明の陶器摺鉢である。これらの時期は6・9・13～16が

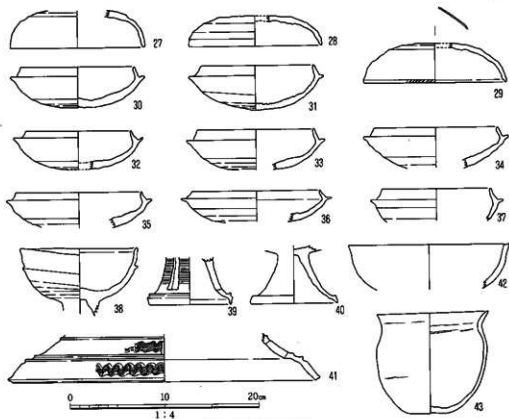


図6 第5層出土遺物

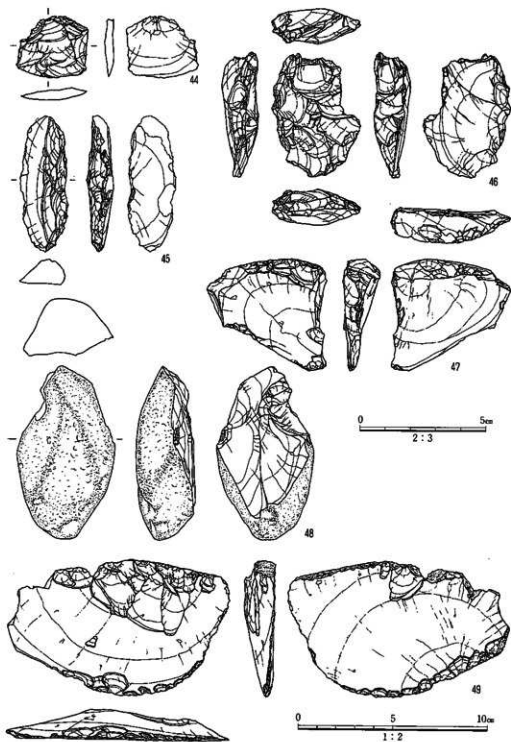


图7 各层出土石器遗物

17世紀、1・2・3・5・7・8・10・11・12が18世紀、4が18世紀後半～末であるが、第2c層の基底で検出された溝からの出土遺物のなかに19世紀に降るものが含まれており、地層自体の形成時期は19世紀となろう。

19～25は須恵器である。19は杯B蓋で、宝珠形のつまみが付くと思われる。20は杯B身である。これらは奈良時代のものであろう。21・22は杯蓋で、21の天井部と口縁部との境は不明瞭であるが、22のそれははっきりとした稜線によって区切られる。21はTK43型式、22はTK208型式であろう。23～25は高杯である。23は無蓋で、2方向に把手を有する。24は3方向にスカシ孔のあるもので、脚部に竹管による刺突文が見られる。25は円形のスカシ孔を4方向に穿つ。26は土師器高杯の脚部で、円形のスカシ孔を有する。

27～43は第5層から出土した(図6)。27～41は須恵器である。27～29は杯蓋で、29の天井部にはヘラ記号が見られ、口縁端部外面にはヘラによる刻みを連続的に施す。30～37は杯身である。口径は32・37が11cm台、36が13cm台で、他は12cm台である。いずれも立上がりはやや内傾する。これらの杯類のうち、37は口径が小さく立上がりが長いことから古相を呈するが、他はTK43型式に属する。38は無蓋高杯である。焼け歪みが著しい。39・40は高杯の脚部である。39は長方形のスカシ孔を有し、40にスカシ孔は認められない。41は器台の脚部である。外面には波状文を2段施し、方形のスカシ孔を有する。42は土師器杯である。口縁端部内面には面をもつ。古墳時代後期～末であろう。43は韓式系土器平底鉢である。粗雑な作りで、内外面には粘土紐の接合痕跡を残す。6世紀のものであろう。42・43はともに器表の磨滅が著しく、体部の調整は不明である。

44～49は各層および後世の遺構から出土した石器遺物で、すべて遊離資料である(図7)。なお、石材はサヌカイトを用いている。44は調整剥片である。背面がおもに2方向からの複数の剥離面で構成される。45は側縁加工のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、対向調整は見られない。46・47はクサビである。46は図の上下および左右方向に使用されたと思われ、四周に加撃の際に生じた細かい剥離面が並んでいる。側方には裁断面が認められる。47は厚さ約1.5cmの板状の剥片を素材とし、上下方向におもに使用されたと思われる。48は石核である。拳大の原礫から横長の剥片を剥離している。49は横形削器である。横長の板状の剥片を素材とし、ていねいな調整で刃部を作っている。以上の石器遺物のうち45は後期旧石器時代に属し、他は時期不明である。

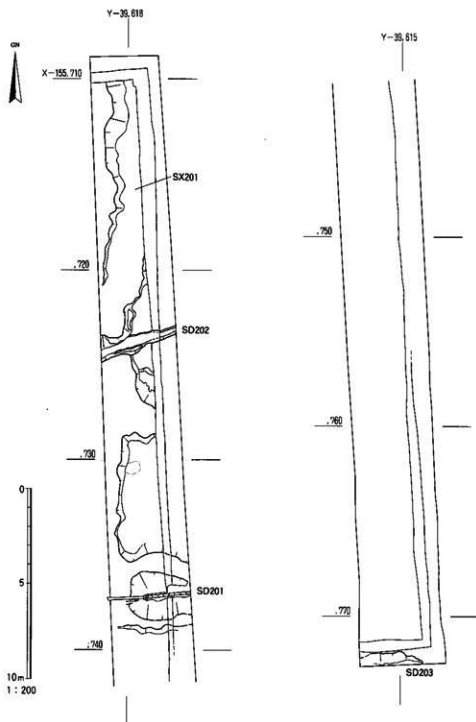


図8 江戸時代の遺構平面図

2) 遺構とその遺物

i) 江戸時代(図8、図版1)

第2c層下面で東西方向の溝を3条と落込みを検出した。

SD201(図9、図版1)

瓦質土管を組合わせて作られた導水施設である。なお、管を埋設するために掘削した土は溝の左右に盛り上げられ、土手状をなしていた(図4)。この上を池を埋積している水成層の第2c層が直接覆っていた。

土管は玉縁を西に向けて接続され、調査区の中ほどで木樋に接続している。接続部分の

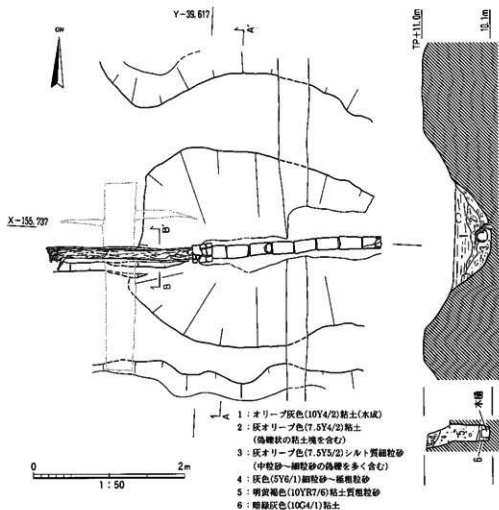


図9 SD201実測図

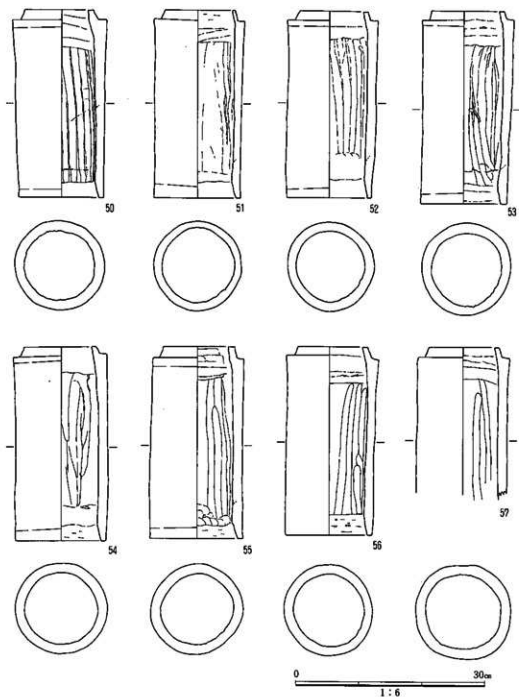


图10 SD201出土遗物(1)

上には平瓦を置いて、管内に水が染み込まないようにしていたと推定される。木樋は段丘構成層を掘り込んで埋設されており、4枚の板を箱状に組合わせていてねいに作られている。土管底の高さと、埋設された方向からこの溝は馬池の水を西へと流すための施設と思われる。

出土遺物は50～57の瓦質土管と、58・59の丸瓦、60の平瓦である(図10・11、図版9)。これらの他にSD201からは18世紀末～19世紀の信楽焼土瓶や、唐津焼・堺焼播鉢の破片が出土しているが、細片のため図示しえなかった。

50～57の瓦質土管は、直径が15cm前後で、長さは下半部が欠損している57を除いて30cm前後である。一方に玉縁をもつ形態で、もう一方は端部が薄くなるように内面を削って仕上げている。これらの土管は厚さ約1cmの粘土板を円筒形の型に巻きつけて作ったと思われる、内面には型からはずしやすくなるための布袋と吊り紐の圧痕が認められる。51～57は型からはずした後に、内面の粘土板の接合部分だけに棒状の工具でナデを施して継ぎ目を消している。型からはずした後の調整方法は、50のみが他と異なり、内面全体に棒状の工

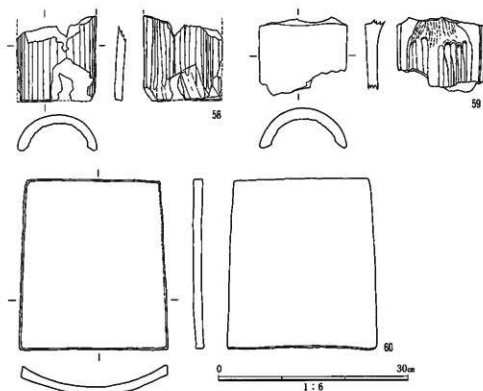


図11 SD201出土遺物(2)

具でいねいなナデを縞状に施す。これは工人差あるいは、製作窯の違いを表す可能性がある。外面の調整はいねいなナデである。焼成は堅緻で、精良な胎土を用いている。

58・59は丸瓦である。いずれも内面には縞状にナデを施す。60は平瓦である。凹面を下にして、瓦質土管と木樋のつなぎ目を覆うように置かれていた。

以上の遺物の年代から、SD201の時期は江戸時代末頃と考えられる。

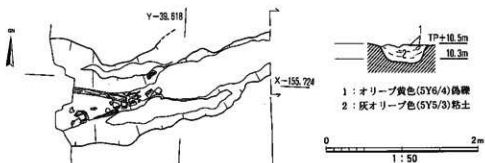


図12 SD202実測図

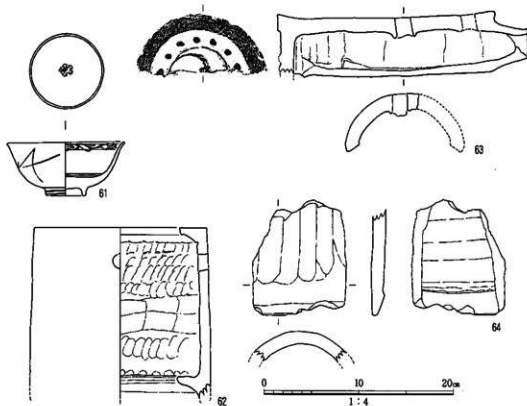


図13 SD202出土遺物



写真2 SD202遺物出土状況

SD202(図12、写真2)

調査区の北部で検出した東西方向の溝で、方位は東でやや北に振れる。幅は1.0～1.4mで、深さは0.2mである。溝内には丸瓦片や板材が散在しており、南側の一部では並んで出土した。これらは本来、組み合わされてSD201のように導水施設として使われていた可能性もある。ただし、土管はなかった。

SD202出土遺物は多くの丸瓦の他に、軒平瓦・肥前磁器・火入れがある(図13、図版8)。

61は肥前磁器碗である。口縁部は端反りで、内面にはくずれた四方棒と思われる帯状の文様帯が認められる。見込みにはコンニャク印判による五弁花が見られ、外面には折松葉文を描く。19世紀前半の波佐見焼であろう。62は瓦質の火入れで、風炉かと思われる。円筒形の器形で、1個所に円孔を穿つ。半分に割れた状態で出土した。63は軒丸瓦で、瓦当の文様は巴文である。64は丸瓦である。

以上、SD202は出土遺物の時期から、江戸時代末頃に機能していたと考えられる。

SD203 南端で認められた東西方向の溝で、幅は明らかでない。出土遺物はなかった。

SD203は、調査区内に存在した馬池と何らかの係わりがあると推定されるが、調査区内では両者の関係を示すものは認められず、他の溝との新旧関係も明らかにできなかった。

このほかに、調査区の中央では落込みSX201がある。遺構の埋土は第3層で、性格は不明である。瓦片が出土した。

ii)古墳時代(図14、図版2・3)

おもに調査区の南半分で掘立柱建物2棟・土壇2基・溝1条・ピット数基を検出した。

a. 掘立柱建物(図15、図版2)

SB701 桁行3間以上、梁行2間の南北棟で、方位はN46°Eである。桁行は4.65m以上、梁行4.27mである。柱間距離は梁行が2.10m、桁行が1.31～1.64mで、柱穴2基が切合う個所が認められることから、部分的な建替えが行われたと思われる。西北角の柱穴のみ直径0.40m、深さ0.30mとやや大きく、他は直径0.30m前後、深さ0.07～0.15mと比較的小さい。柱穴からは須恵器・土師器の細片が少量出土したのみで、このうち1点を図示した(図18)。90は須恵器高杯の脚端部である。5世紀後葉のものであろう。

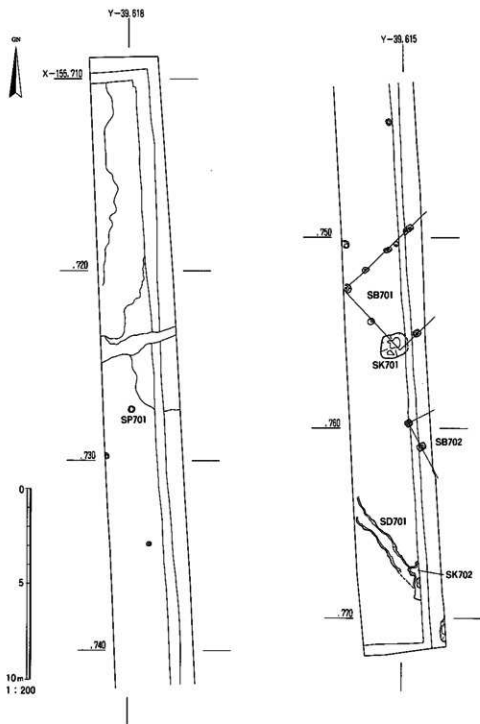


図14 古墳時代の遺構平面図

建物の時期は、南隅の柱穴が6世紀後葉に属する須恵器が出土したSK701に切られていることと、柱穴の出土遺物から、5世紀後半～6世紀中葉と推定される。ただし、調査地全体の出土遺物の時期をみると、5世紀代のものが極端に少ないことから、この時期まで遡る可能性は低いだろう。

SB702(図15) 南北2間以上の掘立柱建物で、柱穴を2基確認したにすぎない。北側に柱穴が認められないことから、建物は南・東方向に展開すると思われる。柱穴の掘形は隅丸方形で、深さ0.3m、柱痕跡は直径0.15mであった。

b. 土壌

SK701(図16、図版3) 直径1.3m、深さ0.4mの土壌で、SB701の柱穴を切って掘削されている。埋土は2層に大別できる。上層は第7層起源の偽礫で人為的に埋戻されたもので、下層は水成の粘土である。本遺構からは須恵器・土師器が数多く出土した。

65～87はSK701出土遺物である(図17、図版11・12)。65～82は須恵器である。65～70は杯蓋である。口径は約13～15cmで、天井部と口縁部との境には稜線がなく、なだらかである。70の口縁端部内面には凹線が走る。71～77は杯身である。口径は約12～13cmで、立上りは内傾する。75～77の底部にはヘラ記号が認められる。これらは70が若干古相を残

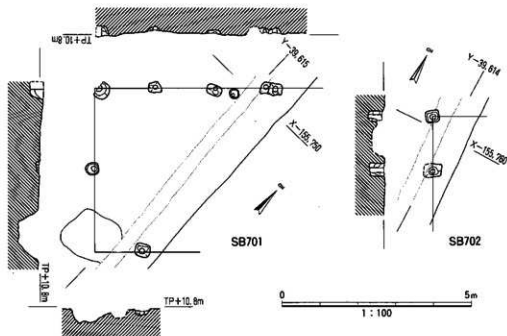


図15 SB701・702実測図

すが、TK43型式におさまるものであろう。78は低脚の高杯である。79は壺の蓋であろう。80は台付壺である。体部外面はタタキののちカキメで仕上げる。体部内面の下半部には同心円の当て具痕を有するが、上半は粘土紐の接合痕跡をそのまま残している。81も壺である。肩の張る器形で、体部外面はカキメによって仕上げている。82は甕である。口縁部は短く、端部を丸くおさめる。83~87は土師器である。83は高杯の杯部で、底部外面には稜線を有する。84は高杯の脚部で、83と同一個体の可能性がある。いずれも磨滅が著しく、調整は不明である。85は把手付碗である。86は壺あるいは甕の体部下半に当ると思われる。87は把手である。これらの土師器は、共伴した須恵器とほぼ同時期のものとみてよいであろう。

SK702(図14) 調査区の南東隅で確認された不整形な土塊で、SD701を切る。埋土から

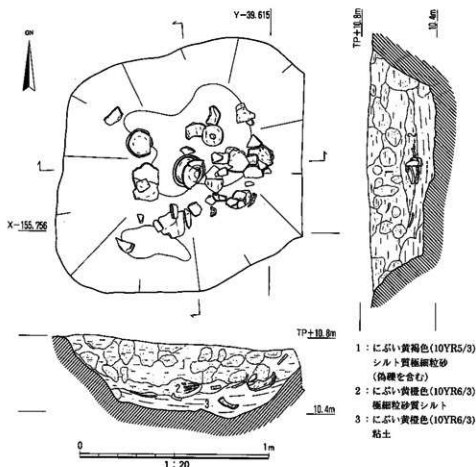


図16 SK701実測図

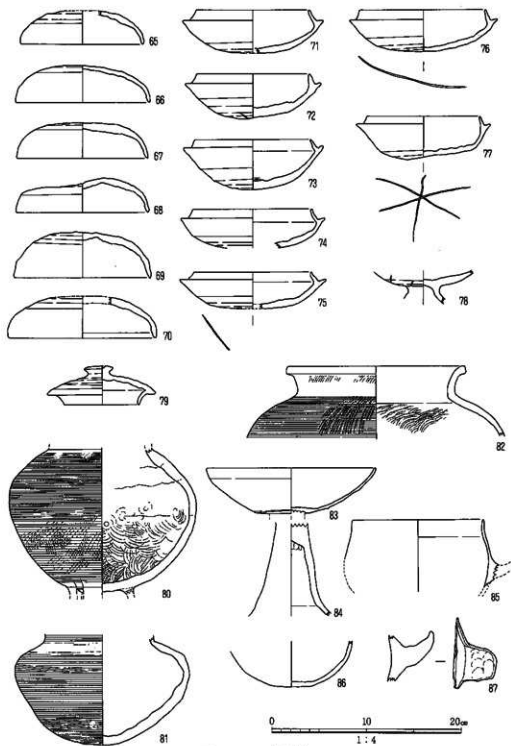


图17 SK701出土遗物

は須恵器・土師器の細片が出土した。

88は須恵器杯身である(図18)。立上がりは比較的短く、内傾する。TK43型式である。

c. 溝

SD701(図14) 南部で確認された溝である。幅0.5m、深さ0.1mで、SK702に切られている。先述のSB701の主軸と方位が直交することから、建物を区画する溝の可能性はある。調査区東半では浅くなり、輪郭が不鮮明になっている。

埋土からは須恵器・土師器・韓式系土器が出土した(図18、図版11・12)。91は須恵器杯蓋で、天井部と口縁部との境の稜は不明瞭となっている。MT85型式であろう。92は須恵器高杯の脚端部である。5世紀後葉のものであろう。93は土師器鍋で片口を有する。磨滅のため内外面の調整は不明である。94は韓式系土器の平底鉢である。口縁部は短く、「く」字状に屈曲する。調整は磨滅のため不明である。内面には粘土紐の接合痕跡を明瞭に残す。

d. ビット

調査区の北部で数基のビットを検出した。これらは本来、建物の一部を構成していたものと思われるが、調査区内で組合うものは確認されなかった。

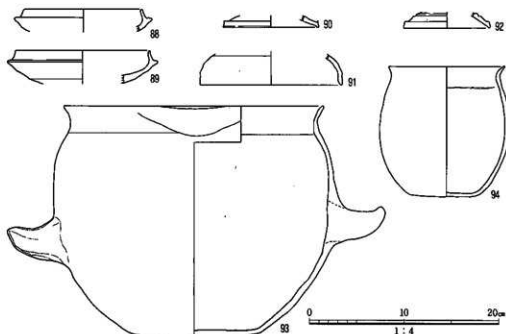


図18 SB701・SK702・SP701・SD701出土遺物
SB701(90)、SK702(88)、SP701(89)、SD701(91~94)

このうちSP701からは89の須恵器杯身が出土した(図18)。立上がりは短く、底部外面をヘラケズリする。TK43型式であろう。

以上で述べた古墳時代の遺構は、時期不明のSB702を除くと、おおむね6世紀代に造られたとみてよいであろう。

3) 小結

調査区は地籍図では字名「池側」に当り、現在も「馬池」と呼称される池の西岸に位置する。「馬池」がいつ頃から溜池として機能していたかについては諸説があるが、1704(宝永元)年の大和川付替え工事に伴って、長原遺跡西部を南北に縦断する通称「馬池谷」を堰き止めて池としたとする説が有力視されていた。このため今回の調査では、池の造営時期や「馬池谷」との関連が明らかになることが期待された。

調査の結果、調査地は馬池の西側縁辺部に当り、池の堆積層と思われる水成層の出土遺物から18世紀には池として機能していたことが確認された。このほか池に伴う導水管や溝などが検出されたが、堤等は認められず、池の造営時期を知りうる資料は確認できなかった。

なお、周辺についてみれば、調査地の南に接して行われたNG99-46次調査では、馬池の堤と思われる南北方向の盛土が見つかった(註1)。さらに馬池の東岸でも、NG99-42・43次調査でこの盛土に対応する堤が検出された。出土遺物の検討から、これらの堤は18世紀初頭に築かれたもので、1704年の大和川の付替えに伴う可能性が示唆されている。さらに、NG99-42・43次調査では堤の下でも17世紀初頭の客土が検出されている。一方、調査区の南西で行われたNG95-28次調査地は、馬池の西側縁辺部に位置し、地籍図によると字名が「寺池」に当るものの、池に関する堆積層や堤は検出されず、調査区の東半が一度地下げされて、上に17世紀初頭の客土とそれ以降に堆積した作土が認められた。これらのことから、「馬池」の堤自体の造営は18世紀初頭といえるが、17世紀初頭には、周辺で客土による地形の変更を行っていたといえよう。

享保8(1723)年に描かれた「長原村絵図」や(註2)、明治期の地図を見ると、馬池西岸は北端で西へ向って屈曲しており、NG99-46次調査で見つかった堤も調査区内で湾曲していたことから、今回の調査地は堤の範囲から外れていた可能性がある。

築堤後も馬池では幾度も改修が行われたようである。調査区内を東西に横切るSD201・202は、出土遺物から18世紀後半以降に作られたもので、先述の調査で確認された堤の最

終的な盛土の時期に相当する。なお、NG99-46次調査でもSD201と同様の瓦質土管をつなげた導水施設が見つかり、馬池の周囲には同様な施設が他にもいくつかあった可能性が高い。馬池の改修については調査結果の他、文献資料からも窺うことができる[東成郡役所編1921]。

一方、古墳時代では、調査区南部で土壇や掘立柱建物が確認できた。周辺では南側のNG95-28次調査で5世紀後半の井戸や掘立柱建物が、NG99-46次調査では土壇や溝が見つかり、このほか、東隣の府立長吉高校敷地内の調査でも古墳時代の遺構が確認されており、付近には当該期の生活域が広がっていたものと推定される。今回検出された遺構の時期はTK43型式を中心としており、1995年から1997年にかけて調査地の北で見つかった遺構の時期に比べると、やや新しい時期となり、周辺では長期間にわたって大規模な集落が営まれることはなかったようである[大阪市文化財協会1999・2000a・2000b]。

従来、「馬池谷」周辺では古墳時代に分散していた集落が、飛鳥時代にはいと瓜破台地の縁辺に集合してみられるようになるとされていた[大阪市文化財協会2000c・2001b]。今回の出土資料はこの直前の時期に属し、長原遺跡西南地区から瓜破遺跡東南地区にかけての集落の変遷を知るうえで貴重な情報を提供しえたといえる。そして、遺構や遺物の量からみても、集落の規模は小さく、短期間で終わるといえ、先ほどの説を裏付けるものであろう。

なお、今回の調査およびNG99-46次調査では、「馬池谷」に関する知見は得られなかった。またNG95-28次調査でも、17世紀初頭の客土の直下が段丘構成層となり、この上で飛鳥・奈良時代の遺構が検出されたことから、地下げされたとはいえ、旧地形はさほど変形を受けていないと推定される。したがって、調査地から南にかけては十分居住に適した地形だったことが推定され、「馬池谷」の中心は調査地より東に位置していたのであろう。

註)

(1) NG99-46次調査は長原・瓜破地区土地区画整理事業に伴うもので、次年度以降に報告書を刊行する予定である。

(2) 長原村絵図は城宏氏所蔵品による[黒田慶一2001]。

第Ⅲ章 瓜破遺跡東南地区の調査結果

第1節 98-32・46次調査

1) 層序とその遺物

i) 層序(図19、図版4、表3)

98-32次調査地(以下Ⅰ区)の基本層序は、現代客土層の第0層および現代作土層の第1層以下は次のとおりである(表3)。第2層は長原2層に相当する作土である。第3層は層厚20cmの作土層で、長原3層に相当する。第4層はオリーブ褐色シルト質極細粒砂であり、層厚は5~15cmである。第5層を耕起したものであり、長原4層に相当する。第5層は調査区のはほぼ全域に分布する。オリーブ褐色極細粒砂質シルトで、層厚は15cmである。長原7A層に相当し、下面では多数の溝を確認した。第6層は水成層で、層厚20cmの黄灰色シルトであり、部分的に分布する。横大路火山灰起源と思われる火山ガラスを含んでいることから、長原12/13層漸移帯以上に相当する。第7層は黄褐色粘土であり、長原14層以下の段丘構成層である。

98-46次調査地(以下Ⅱ区)は近世に地下げが行われたと思われる。基本的には現代客土の直下が長原15層以下の段丘構成層となり、この間の層序は削剝されている。西半部では

表3 98-32・46次調査区の層序

長原 標準層序	層序	層相	層厚(cm)	遺構	遺物	特徴	掲載遺物
0	0	現代客土	100~160				
1	1	現代作土	5~10				
2	2	黄褐色細粒砂~暗灰黄色細粒砂	5	▼SD201~203, 耕作溝	瓦片陶磁器・瓦器・灰 土器・土師器・瓦	作土	
3	3	黄褐色~灰オリーブ色シルト質細粒砂	20	▼SD301, 耕作溝	瓦質土器・瓦器・黒色 土器・灰土器・土師器	作土	95・96
4	4	オリーブ褐色シルト質細粒砂	5~15		白磁・瓦器・黒色土器 灰土器・土師器・石皿		115
7A	5	オリーブ褐色極細粒砂質シルト	15	▼SB701,SK701~703, SP701~706,SD701~721, SK701	須恵器・土師器	作土	97~114・116
12/13 層間 移行以上	6	黄灰色シルト	20		サヌカイト	水成 含火山ガラス	
14層以下	7	黄褐色粘土	30±			段丘構成層	

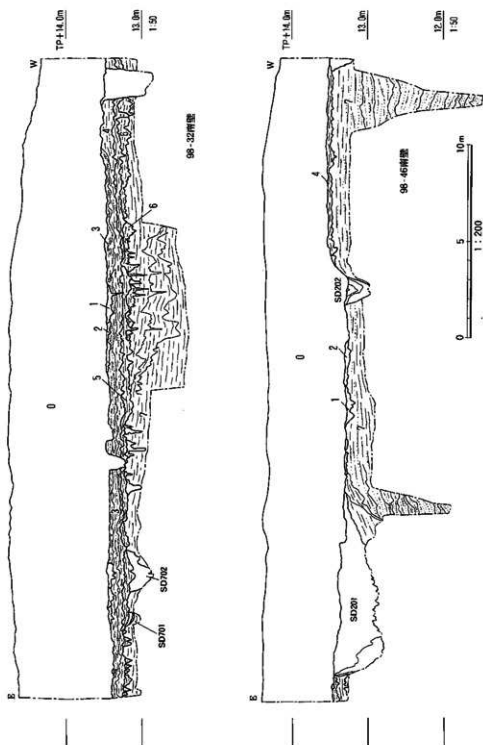


图19 98-32、46次调查区南壁断面图

長原4B層に相当すると思われる作土層が残っており、SD201の南側でのみ長原2・4および7A層が認められた。

ii) 各層出土の遺物(図20、図版13)

95・96は第3層から出土した。95は瓦器碗で口径は12.8cmを測る。内面にヘラミガキは認められない。14世紀のものであろう。96は瓦質土器指鉢である。15世紀頃と思われる。

97～114・116は第5層から出土した。97～110は須恵器である。97・98は杯G蓋で、

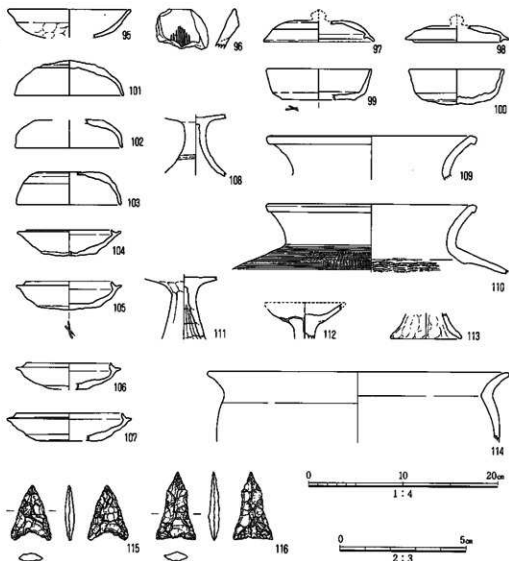


図20 各層出土遺物
第3層(95・96)、第4層(115)、第5層(97～114・116)

99・100は杯G身である。101～103は杯H蓋である。101・102の天井部はヘラ切り後不調整で、103は天井部をヘラケズリする。104～107は杯H身である。いずれも立上りが短く内傾する。104～106は口径が9.0cm前後で、いずれも底部はヘラ切り後不調整である。107はこれらよりも口径がやや大きく、底部にはヘラケズリが見られる。なお、99および105の底部には「×」字状のヘラ記号が認められる。これらの杯類は97～99が飛鳥Ⅱの新相、100～102・104～106が飛鳥Ⅱ、103・107は飛鳥Ⅰに属するものであろう。108は高杯である。脚部の外面には凹線を巡らす。109・110は甕である。いずれも口縁部は短く外反し、端部を屈曲させて丸くおさめる。これらの須恵器の年代観から第5層は飛鳥時代前半～中葉に形成されており、長原7A層に相当すると思われる。

111～114は土師器である。111～113は高杯で、111は外面をヘラケズリによって面取りし、内面には粘土紐の接合痕跡を顕著に残す。112・113の外面にはユビオサエ痕が残る粗雑な調整が施される。114は甕で、口縁部は短く外反する。調整は磨滅のため不明である。

115は第4層から出土したサヌカイト製の凹基無茎式石甕で、細部調整はていねいに施される。縄文時代のものであろう。116は第5層から出土したサヌカイト製の凹基無茎式石甕で、平面形は五角形を呈し、挟りはごく浅い。縄文時代晩期のものであろう。

2) 遺構とその遺物

i) 室町～江戸時代(図21、図版4・5)

第2層下面では溝を検出した。これらのうち調査区のほぼ中央を東西に横切るSD201は坪境の溝と思われ、西から東への水の流れが確認された。溝は少なくとも1回は掘り返されており、江戸時代前半まで使用されたのち、埋戻されている。溝の埋戻しに際しては、長原6層や段丘構成層の偽層が確認されることから、溝の北側の土を用いたものと考えられる。

埋土からは117～130が出土した(図22、図版13)。117は青花碗である。118は肥前系陶器碗である。119～121は唐津焼で、皿あるいは鉢である。122は肥前系陶器で京焼風のものであろう。123は丹波焼系播鉢である。124は備前焼播鉢である。125は焼締め陶器の鉢である。126は器種不明の土師質土器である。これらの陶磁器類は117・124が16世紀で、118・119・120・123が17世紀のものであろう。127は須恵器杯G蓋で、乳頭状のつまみをもつ。128は須恵器杯H身で、底部はヘラ切り後不調整である。これらの須恵器は飛鳥時代

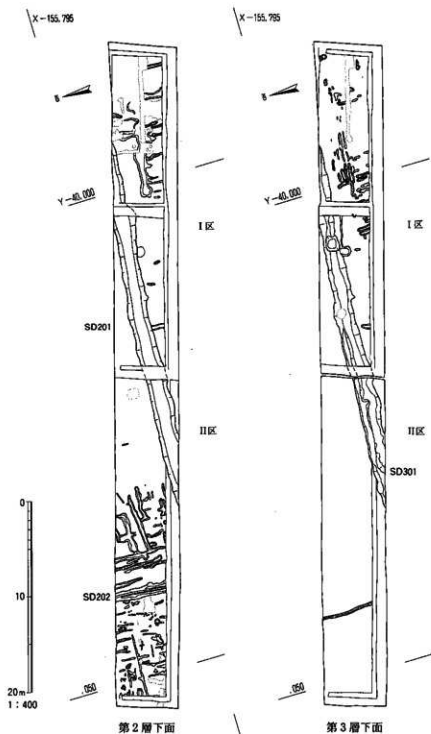


図21 室町～江戸時代の遺構平面図

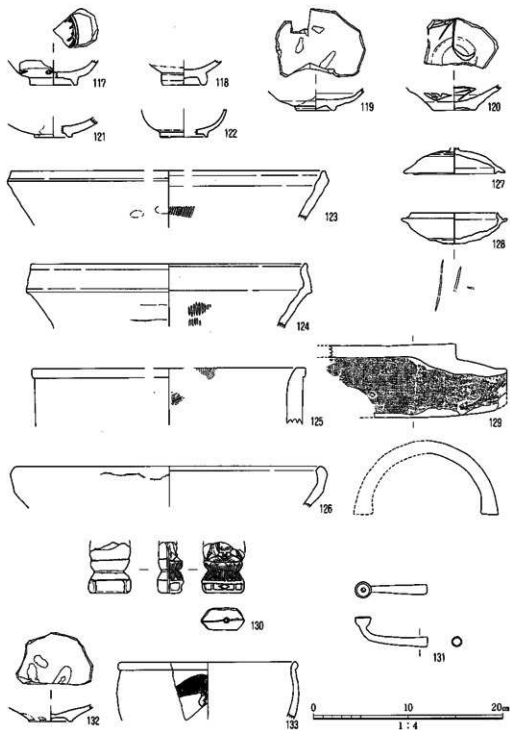


図22 室町～江戸時代の溝出土遺物
SD201(117～130)、SD202(131)、SD203(132・133)

の遺構から遊離したものであろう。129は丸瓦である。130は土師質の土人形で、蓮華座に座る仏像を表している。型押しで整形しており、底部には棒状のものを差し込んだと思われる。この穴は貫通していない。

SD202(図21・22) II区で検出した南北方向の溝である。江戸時代の灌漑に伴うものと思われる。131はSD202より出土した煙管である。

SD203(図21・22) I区で検出した。出土遺物のうち132は唐津焼皿で、内面の3箇所に砂目の痕跡が見られる。133は唐津焼鉢である。いずれも17世紀のものであろう。

第3層下面ではSD201の前身となる溝SD301が認められた(図21)。I区ではこの南で東西・南北方向の小溝を多数検出した。これらは幅0.2m、深さ0.1m未満で、耕作に伴うものであろう。

ii) 飛鳥時代(図23、図版5～7)

a. 掘立柱建物

SB701(図24、図版6) 東西6間、南北2間の身舎で、南側に東西4間、南北1間の庇が付く東西棟の掘立柱建物である。主軸方向はN8°Wである。桁行9.56m、梁行5.65m(身舎3.65m、庇2.00m)で、庇部分を含めた床面積は54.01㎡である。身舎の柱間距離は桁方向が1.40～1.75mとややばらつきがある。一方梁行では3.65～3.75mであり、柱筋が通っている。柱穴は一辺0.80～1.00mで、深さは0.20～0.40mある。柱痕跡は直径0.15m程度のもが多い。庇の柱穴は直径0.30mと小さい。本来は床束が存在した可能性が高いが、柱穴の深さは浅いもので0.10m前後しかなく、仮にあったとしても後世に削平されたと思われる。柱穴の出土遺物は須恵器・土師器の細片で時期を判定しうるものはなかったが、周辺の溝より出土した遺物から、建物の時期は7世紀中葉の可能性が高いと思われる。なお、この建物はUR86-11次調査で確認された東西棟のSB22に構造や大きさが類似している[大阪市文化財協会2000c]・[大庭重信2000a]。ただし、SB22はSB701とは方位が若干異なっている。

b. 柱穴

I区の西端ではSP701～705を検出した。いずれも直径0.2m、深さ0.2mであり、柱痕跡は確認されなかった。

c. 溝(図23、図版5～7)

I・II区ともに東西、南北方向の溝を多数確認した。これらは規模により、大・小の2群に分けられる。

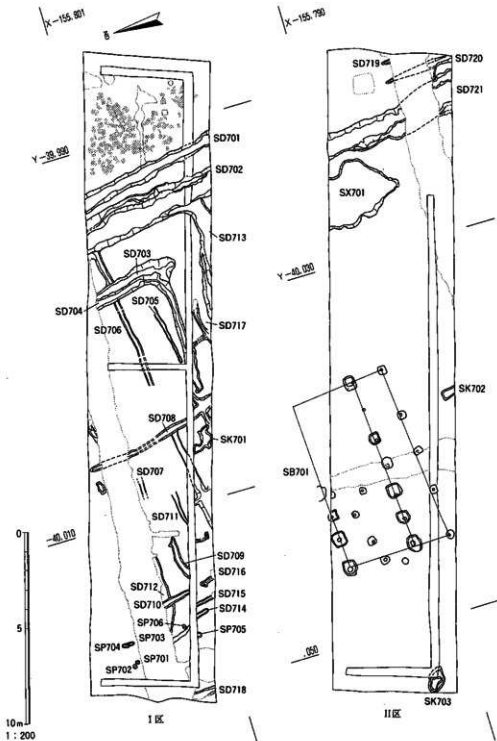


図23 飛鳥時代の遺構平面図

I区では18条の溝を検出した。このうちSD701～704・708・710・714～716・718は南北方向、これ以外は東西方向であった。なお、これらの切合いは、南北方向のSD703・704・708・710などが、東西方向のSD706・712をそれぞれ切っていた。この逆に東西方

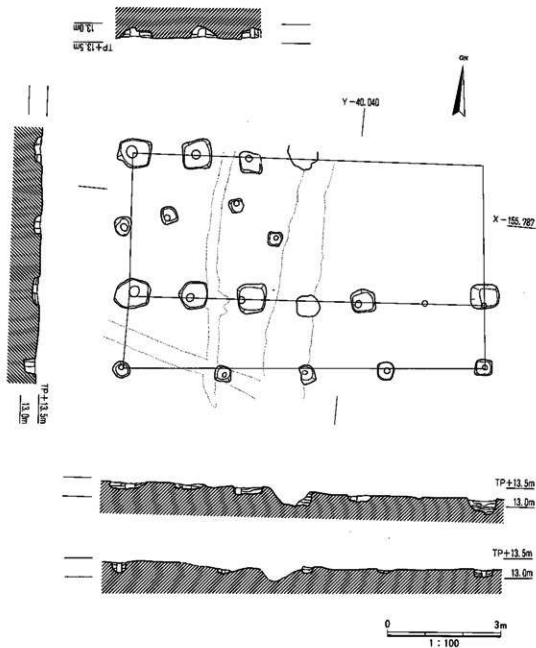


図24 SB701実測図

向の溝が南北方向のものを切る例は見当らなかった。このことから、溝の時期には大きく分けて東西、後に南北方向の2時期があったと推定される。ただし、出土遺物には時期差は見られないことから、ほとんど相前後して掘削されたものであろう。

SD701は南北方向で、幅は0.6m、深さは0.2mである。飛鳥Ⅱに属する須恵器が出土している。

SD702の幅は1.2mと広く、深さは0.3mあり、SD701と平行する。NG87-65次調査で確認されたSD04・05はSD702と一連のものと思われる[大阪市文化財協会1994]。この溝を境に東西では様相が異なり、東側は踏込みがあるのみで遺構はなく、逆に西側には後述する小溝群が東西、南北に走っている。

SD703はSD704と重なって検出された溝で、東西方向から南北方向へ屈曲する。SD703

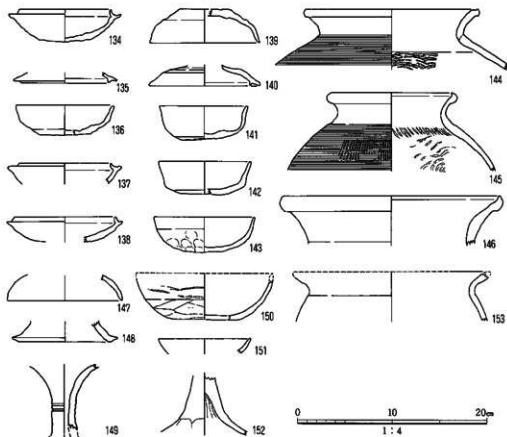


図25 飛鳥時代の溝出土遺物

SD701(134・144)、SD702(135・138・145・150)、SD704(146・148)、SD705(149)、SD706(151)、SD712(147)、SD713(152)、SD717(153)、SD718(143)、SD720(139)、SD721(140・142)

がSD704を切る。またこれら2条の溝はSD706を切る。

SD713はSD702に切られる東西方向の溝で、幅は0.9m、深さは0.2mである。須恵器・土師器が出土した。

それ以外の溝はいずれも幅0.2m、深さ0.05m程度の畝間状の小さなものである。これと類似した遺構が西隣りのUR86-11次調査区の北部でも確認されており、畑地と推定されている。今回の例も同様な畑地としての性格が考えられよう。出土した遺物は飛鳥Ⅱを中心とするもので、UR86-11次調査で確認された建物群と同時期である。

Ⅱ区では南北方向のSD719~721が認められた。

SD719・720 いずれも幅0.1~0.3m、深さ0.05mと浅いものであった。SD720からは飛鳥Ⅱに属する須恵器と土師器の細片が出土した。

SD721 幅0.9~1.3m、深さ20cmの溝で、飛鳥Ⅱに属する須恵器および土師器が出土している。この溝の延長部と思われるものが北側のUR91-22・NG87-65次調査で確認され、すでに報告されている。なお、この調査では溝を切る南北方向の横が認められたが、今回の調査では確認されなかった。この溝の東側からⅠ区のSD701・702との間には幅が狭く浅い溝が分布する。

d. 溝出土遺物

134~153は飛鳥時代の溝からの出土遺物である(図25、図版13)。

SD701からは134・144が出土した。134は須恵器杯H身である。底部はヘラ切り後不調整である。144は須恵器甕である。口縁端部内面を凹ませる。

SD702からは135~138・145・150が出土した。135~138・145は須恵器である。135は杯G蓋で、136は杯G身である。137・138は杯H身である。145は甕である。150は土師器杯で、体部外面の上半をヘラミガキし、下半はヘラケズリを施す。内面の暗文の有無は不明である。

SD704からは須恵器146・148が出土した。146は甕で、口縁端部内面をつまみ上げる。148は甕の高台であろう。SD705からは須恵器甕の頸部149が出土した。外面には2条の凹線を巡らす。SD706からは土師器高杯の杯部151が出土した。SD712からは須恵器杯H蓋147が出土した。SD713からは土師器高杯の脚部152が出土した。内面にはシボリメが見られる。SD717からは土師器甕の口縁部153が出土した。SD718からは土師器杯143が出土した。底部外面はユビオサエ痕が顕著であり、在地の土器の系譜を引くものであろう。

SD720からは須恵器杯H蓋139が出土した。天井部はヘラ切り後不調整である。SD721か

らは140～142が出土した。140は杯G蓋で、かえりは短い。141・142は杯G身である。

以上の遺物は、須恵器では杯H蓋147が飛鳥Ⅰに比定されやや古相を呈するが、杯G蓋135・140と、杯G身136・141・142、杯H蓋の139、杯H身の134・137・138が飛鳥Ⅱに属するものであろう。また、土師器杯143・150についても飛鳥Ⅱに属すると思われる。このように、飛鳥時代の溝からの出土遺物は飛鳥Ⅰ～Ⅱに属しており、切り合い関係から溝の時期には少なくとも2時期はあったようである。このことから、建物の存続時期は7世紀前半～中葉といえ、さらに、7世紀前半に比定される飛鳥Ⅰに遡る遺物が少ないことから、中心となる時期は7世紀中葉と推定される。

e. その他の遺構

SX701 SD703の西側に位置する輪郭が不鮮明な遺構である。水成の粘土が堆積しており、下面には踏み込みが多い。削平をうけた溝の一部と思われる。

3) 小結

今回の調査地は東西方向に長く延びるものであった。これに沿って中世に遡る坪境の溝が東西方向に検出された。ここからは当地区ではこれまで出土例の少ない中国産の陶磁器が出土しており注目される。

また、飛鳥時代では建物や溝などの遺構が検出され、調査地から北西一帯に広がる当該期の大規模建物群の一部をなすことが明らかになった。これらの建物群は長原遺跡東部における水田の開発を統括した人々の屋敷地として認識され、その分布と変遷についてまとめられてきた[大阪市文化財協会2000c]・[大庭重信2000a・b]。これら周辺の調査成果から当地区の景観を考えるならば、掘立柱建物群を中心として、周囲に耕作地が拡がり、それを囲繞するように溝あるいは柵が巡っていたと思われる。この成果より抜粋した遺構の分布状況については図26に示している。なお、図中のスクリーントーンで示した遺構は[大庭2000a]で提示された第3a段階(7世紀中葉)のものである。今回の調査で検出した遺構は、出土遺物からほとんどこの時期と考えられる。以下では図26に基づいて調査地内の遺構についてみていきたい。

Ⅱ区では、調査区から北西にかけて確認された建物群の南東隅に位置する掘立柱建物SB701を検出することができた。この建物の柱筋の方位が、UR86-11次調査のSB17の東辺と一致することが、両者を同時期とする手がかりとなっている。また、前掲書ではSB701と同時期で形状が類似する建物として、UR86-11次調査で確認されたSB22が挙げられて

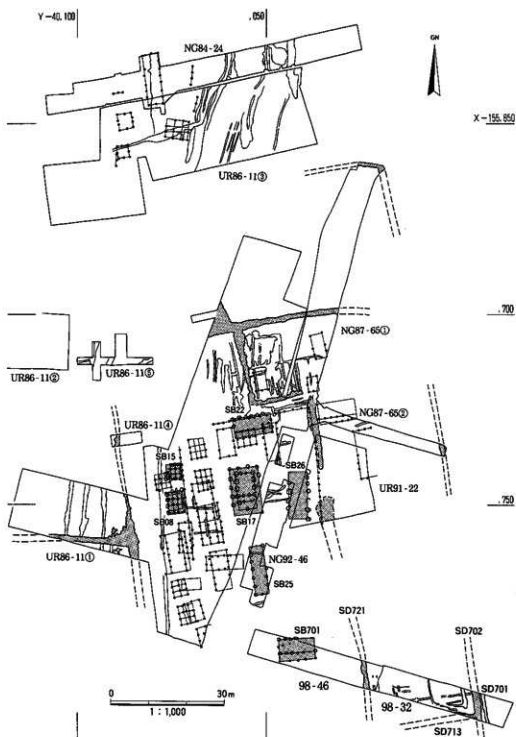


図26 飛鳥時代の主要な遺構分布

〔大阪市文化財協会2000c〕図83より一部を改変、網掛け部分はSB701と同時期と推定される遺構

いる。

ここで、Ⅰ区で検出した南北方向の溝SD701・702は建物群の東方を画する溝と考えられ、これに取付くSD713も建物群の南を画する目的で掘削された可能性がある。仮にそうだとすると、SB701の南にはSD713との間に広い空間が存在したこととなり、ここに建物が建てられていた可能性も否定できない。

また、今回は建物群を囲む橋列は確認できなかった。[大阪市文化財協会2000c]によれば、建物群の北側を画する溝で飛鳥Ⅲの遺物が出土したことから、7世紀後葉の段階では溝が建物群を区画し、その内側に橋列が巡らされたと推定されている。今回、建物群の南東を画する溝からはこの時期の遺物は確認されておらず、少なくとも7世紀後葉にはこれらの溝はすでに埋没していたことが指摘できよう。

別表 長原遺跡の標準層序2001〔趙哲浩2001〕

[illegible]

— 上野原 4, 下野原 5, 越前原 10

【圖書編號】0261 4-235

引用・参考文献

- 大阪市文化財協会1990a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ
1992、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅴ
1994、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
1996、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅵ
1997a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅸ
1997b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅹ
1999、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅺ
2000a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ
2000b、『長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ
2000c、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』
2001a、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ
2001b、『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ
- 大庭重信2000a、『1区建物群の変遷』：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.169-175
2000b、『周辺の状況からみた建物群の性格』：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.180-182
- 黒田慶一2001、『大地の記憶－馬池の成立ち－』：大阪市文化財協会編『葦火』95号、pp.6-7
- 古代の土器研究会編1992、『古代の土器1 都城の土器集成』
- 高橋工1999、『長原遺跡および北詔周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形環境の変化と集落の動態』：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.79-106
2000、『飛鳥時代の集落について』：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ、pp.145-149
- 田中清美2000、『飛鳥時代須恵器・土師器の編年の位置付け』：大阪市文化財協会編『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』Ⅻ、pp.163-168
- 田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古学クラブ
1981、『須恵器大成』 角川書店
- 趙智済1995、『本書で用いる層位学的・堆積学的視点からの用語』：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ、pp.41-44
2001、『長原遺跡の地層』：『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅻ、pp.7-28
- 東成郡役所編1921、『東成郡誌』下巻
- 奈良国立文化財研究所1976、『平城宮発掘調査報告』Ⅷ 奈良国立文化財研究所学報第26冊

あ　と　が　き

1981年以来継続されてきた長吉瓜破地区土地区画整理事業に伴う発掘調査も、2000年度で終了し、あとは本書に続く残り2年度分の報告書の刊行を待つのみとなった。点的な、あるいは線的な発掘調査を積み重ねた結果、ようやく面的な遺跡の拡がりと地域の体系的な変遷を把握することができるようになった。

調査開始時には広々とした田園の拡がっていたこの地域も、区画整理事業の進行に伴って、市街地へと大きく様変わりした。さらに、今後もいっそう市街地化の進むことが予想される。この中で、発掘調査の成果が遠い過去のものとして忘れ去られることのないよう、今後も普及活動を続け、地域のために活用していくことが必要なのであり、そのためには資料の検討と研究に全力を尽くさなければならぬ。

この区画整理事業に伴う発掘調査と報告書の作成については、関係者各位ならびに市民の皆様のなみなみなならぬご協力と、埋蔵文化財に対する深いご理解を賜った。ここに改めて深い敬意と謝意を表すものである。

(高橋工)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と、地名・遺跡名などの固有名称を一括して収録した。

M	MT85型式	21		石蔵	28
T	TK43型式	10、19、21、22、23	つ	土人形	31
	TK208型式	10		埴	22
				坪境溝	28、36
あ	足跡化石	8			
	飛鳥Ⅰ	28、36	て	寺池	22
	飛鳥Ⅱ	28、34、35、36			
い	池割	22	と	導水施設	12、16、23
				土管	12、14、15、16、23
				土壇	16、18、19、23
う	馬池	3、5、8、14、16、22、23	な	ナイフ形石器	10
	馬池谷	3、22、23		ナウマンゾウ	8
	瓜破台地	23			
か	唐津焼	8、14、28、31	の	軒丸・軒平瓦	16
	韓式系土器	10、21			
き	煙管	31	ひ	肥前磁器	5、8、16
く	クサビ	10	ふ	風炉	16
せ	青花	28	ほ	掘立柱建物	3、16、18、23、31、36

**Archaeological Reports
of the
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVIII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1998**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SB : Building

SD : Ditch

SK : Pit

SP : Posthole or pit

SX : Other features

CONTENTS

Preface

Explanatory notes

Chapter I Outline and progress of research work 1

S.1 The outline of excavations in fiscal 1998 1

S.2 Outline and progress of excavations 3

1) South-western sector of the Nagahara Site 3

i) Reserch area NG98-8

2) South-eastern sector of the Uriwari Site 3

i) Reserch area NG98-32 and NG98-46

Chapter II Results of research in the South-western sector of the Nagahara Site

..... 5

S.1 Research area NG98-8 5

1) Stratigraphy and finds from each stratum 5

i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum

2) Features and finds 10

i) The Edo Period ii) The Kofun Period

3) Conclusion 22

Chapter III Results of research in the South-eastern sector of the Uriwari Site .

..... 25

S.1 Research area NG98-32 and NG98-46 25

1) Stratigraphy and finds from each stratum 25

i) Stratigraphy ii) Finds from each stratum

2) Features and finds 28

i) From Muromachi to Edo Period ii) The Asuka Period

3) Conclusion 36

Table · Bibliography 39

Postscript

Index

English Contents and Summary

Reference Card

ENGLISH SUMMARY

In this volume we report the results of three excavations (total area 764m²) undertaken during fiscal 1998 prior to urban redevelopment at the Nagahara and Uriwari sites, situated in Hirano Ward, in the southeastern part of Osaka City. Almost continuous investigation of the sites since 1975 has revealed archaeological features and remains from the Palaeolithic through to the Pre-Modern period (AD 1603 - 1868). The main results for this series of excavation are as follows:

1) Kofun period

A ditch and the remains of a hottatebashira style building of the 6th century were discovered in the southwestern portion of the NG98-8 investigation of the Nagahara site. These features appear to be associated with a village discovered south of the investigation area previously. The buildings may have lay on the edges of the main village.

2) Asuka period

A hottatebashira style building and surrounding ditch dating to the early to middle 7th century were discovered at the Uriwari UR98-42 and UR98-43 investigation areas (figure 23, illustration 6 and 7). The building is located in the southwestern corner of a cluster of similar buildings that stretches to the Northwest of the excavation area. There was also evidence of cultivation including irrigation ditches on the east side of the remains of the building, these are believed to be part of a field area.

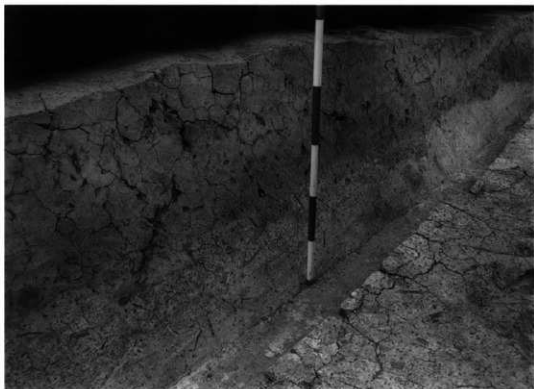
3) Edo period

An accumulation of settlements in an irrigation pond (Umaike) believed to have been excavated in 1704 was detected in the southwestern portions of NG98-42 and NG98-43 investigation areas of the Nagahara site. A water conduit from made of earthenware pipe and dating to the latter half of the Edo period was found in this area suggesting that it may have led to the west Umaike pond. However, the original banks of the Umaike pond were not found. A ditch running east-west Aitsubozakai-mizoAjwas found in the southeastern portion of the Uriwari site UR98-42 and UR98-43 investigation areas along with rarely observed imported blue and white porcelain from China.

報 告 書 抄 録

ふりがな	ながはら・うりわりいせきはつくつちょうさほうこく 18							
書名	長原・瓜破遺跡発掘調査報告XⅧ							
副書名	1998年度大阪市長吉瓜破地区土地区画整理事業施行に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	小田木富慈美・高橋工・Matthew W. Van Pelt							
編集機関	財団法人 大阪市文化財協会							
所在地	〒540-0006 大阪府大阪市中央区法円坂 1-1-35 TEL.06-6943-6833							
発行年月日	西暦 2002年 3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながはらいせき 長原遺跡	ながはらいせき 大阪府平野区 長吉長原西3丁目	27126	—	34° 36′ 00″	135° 34′ 40″	8次 19980511～19980826	292	土地区画整理印像 (長吉瓜破地区)施 行に伴う調査
うりわりいせき 瓜破遺跡	うりわりいせき 大阪府平野区 瓜破東8丁目	27126	—	34° 36′ 45″	135° 33′ 55″	32次 19981015～19981222 46次 19981217～19990317	236 236	
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
長原遺跡	集落	旧石器時代				石器遺物		
	田畑	縄文時代				石器遺物		
	その他	古墳時代		掘立柱建物 2 棟・溝・ 土壇		土師器・須恵器・韓式系土器		
		鎌倉～江戸時代		溝		国産陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師 器・瓦・瓦質土管		
瓜破遺跡	集落	旧石器時代				石器遺物		
	田畑	縄文時代				石器遺物		
	その他	飛鳥時代		掘立柱建物 1 棟・溝		土師器・須恵器		
		鎌倉～江戸時代		用水路・耕作溝		国産陶磁器・瓦質土器・瓦器・土師 器・土製品・瓦・煙管		

圖 版



調査区東壁断面



SD201(東から)



第2c層基底面遺構
(北から)



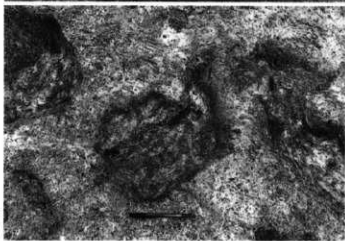
第2c層基底面遺構(南から)



SK701遺物出土状況
(西から)



第7層上面ナウマンゾウ足跡化石
(東から)



第7層上面ナウマンゾウ足跡化石
(西から)



I区 南壁断面(北から)



I区 SD201断面(東から)



Ⅱ区 第3層下面遺構(西から)



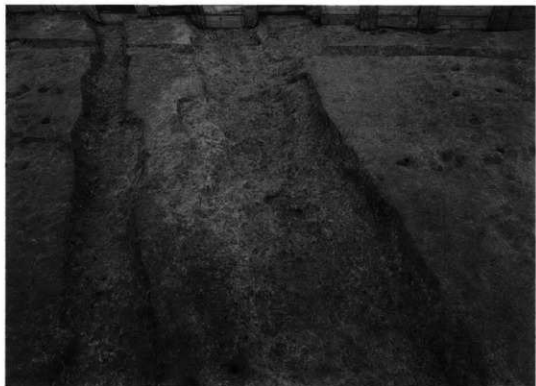
Ⅰ区 第5層下面遺構(東から)



I区 飛鳥時代の遺構(西から)



II区 SB701(西から)



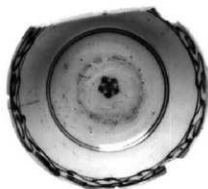
I区 SD701・702(北から)



II区 SD721(北から)



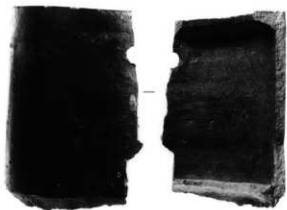
1



61



63



62



18



SD201出土土管(50~56)



22



31



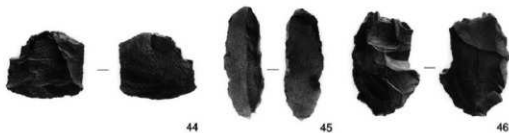
32



35



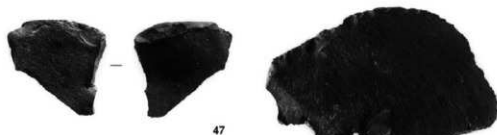
93



44

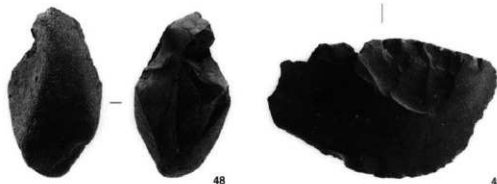
45

46



47

48



49

SD701(93)、剥片(44)、ナイフ形石器(45)、クサビ(46・47)、石核(48)、横形削器(49)



65



68



66



69



79



73



71



72



74



75



76



77



83



42



43



94



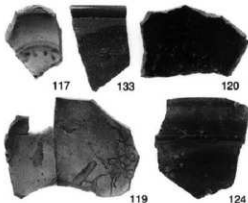
80



81



38



117

133

120

119

124



130



131



136



141



105



107



104



128



150



98



145



115



116

大阪市平野区 長原・瓜破遺跡発掘調査報告 XVIII

ISBN4-900687-51-0

2002年3月29日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂1-1-35

(TEL 06-6943-6833 FAX 06-6920-2272)

印刷・製本 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区湊江南2-6-8

**Archaeological Reports
of the
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVIII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1998**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association

**Archaeological Reports
of the
Nagahara and Uriwari Sites in Osaka, Japan**

Volume XVIII

**A Report of Excavations
Prior to the Development of
the Nagayoshi-Uriwari Area in fiscal 1998**

March 2002

Osaka City Cultural Properties Association